

佐渡の自然と文化

菊地 一郎

佐渡の自然

来いとゆたとて行かりようか佐渡へ

佐渡は四十九里波の上

という歌詞が佐渡おけさにある。この唄を聴くと、

本土と佐渡はずいぶん遠く感ずる。『佐渡の民謡』によればこの唄は他国で唄った唄で注に「三十年許り昔の小歌に佐渡は四十九里波の上とうたひしは和島マツより小木の湊へわたるをいふ歟海上四十九里あり」（滝澤馬琴）とある。能登輪島から佐渡小木港まで約一三〇kmである。古く江戸時代の頃の小唄にでる佐渡は遠島流人の島の心象がこのような表現となつたのではない

か。

本土と佐渡の最短距離は第九管区海上保安本部によれば新潟市角田岬と佐渡松ヶ崎の鴻ノ瀬鼻で三一・四kmであり、海上国道三五〇号線の新潟港から両津港は五五・五km、直江津港から小木港は六四・八kmである。島の面積は八五五・二六km²で沖繩本島につぐ離島であり、東京二三区の一・四倍である。海岸線は二八〇・四kmで奇岩あり白砂青松ありで、風光明媚である。そして入り江入り江は港として漁港として最適である。

佐渡最高峰金北山（二一七二m）は海面からそそり立ち、山間地の二千、三千層の山に匹敵する雄姿は観る者に感動をあたえる。佐渡生まれの人にとって帰省時に両津湾から眺める金北山は、

ふるさとの山に向ひて

言うことなし

ふるさとの山はありがたきかな

この石川啄木の歌そのものである。金北山は特に春がよい。加茂湖のほとりの桜と残雪の金北山の眺めは一枚の絵として見事である。

国仲平野、羽茂平野は田園が広がり中程に立つと、ここが島かと思う。この平野で生き物を育む環境保全型稲作、即ち農薬と化学肥料を減らしたトキの郷米は美味しいと好評である。また島の周りの海成段丘にも田や畑があり、こども米、野菜、果物がよく採れる。

佐渡の冬は新潟県内で最も雪が少なく温かい、夏は新潟市よりも涼しい。これは季節風、対馬暖流やリマン海流のお陰だと言われる。そのため暖地系、寒地系と植物は一七〇〇種と多く、南佐渡では温暖な土地の産物と思われるミカン、枇杷、ル・レクチエが採れ、殊におけさ柿はトキの郷米を凌駕するまでの移出高になつている。

また樺の島でもある。戦前、戦後しばらく南佐渡では樺林や畑、屋敷の周りのヤブツバキでツバキ油を生

産した。日本有数の生産地であった。江戸時代には奉行所の管理する御林まであったほどである。

『日本書紀』に佐渡の禹武の邑人が椎の実を煎る話が出てくるが、この椎は常緑樹のスタジイで佐渡が北限である。他に北限の植物としてアカガシなどがあり、また落葉樹のヤマザクラは日本海側の北限である。

寒地系の果物としては林檎などが採れ、移出している。南限植物としてはシオマツバ、エゾツルキンバイ、ハマベンケイソウなどがある。

この頃、佐渡外海府の杉の巨木が話題になるが、かつて佐渡に縄文杉があった。羽茂川上流の川茂に江戸時代末期に伐採されたといわれる太郎杉の切り株が残る。推定樹齢二一〇〇年、長径五・四尺、短径三・六尺、幹周一四・五尺である。

さらに島ゆえに佐渡固有のサドマイマイやサドギセルなどサドの名をつけた生物もいる。

鳥類の種類も多く、トキの他渡り鳥を含め三〇三、四〇種が観察出来るといふ。キジ、カモなど冬になれば今も狩猟する。その美味しさは格別である。狩猟のことを言えばウサギも独特の味をもつ。

海流のお陰で魚介類も豊富であり食用としては南方

系のマグロ、ブリ、シイラ、トビウオなど、北方系のサケ、タラ、マスなど、さらにタイ、ヒラメ、イカ、タコ、アワビ、サザエなどあげたらきりがない。

季節、季節に新鮮な山の幸、海の幸は生活を豊かにしてくれる。佐渡は昔から米や果物、ブリなど農・海産物の移出が盛んであり、都会での市場の評価は実に高い。それが佐渡の農民漁民の誇りである。

佐渡の文化

島民と渡来人と流人

佐渡にいつ頃から人が住んでいたか明らかではないが、遺跡としては縄文早期の岩屋山洞窟遺跡があり、中期になると長者カ平遺跡など数カ所ある。次の弥生時代の遺跡もあり、この時代には本土から玉作の技術が伝わったといわれている。さらに古墳時代になると製塩跡などが見つかっている。大和政権時代になり中央集権国家の体制が次第に整って、大宝元年（七〇二）大宝律令が完成。地方組織として国、郡、里がおかれた。唐に習った律令国家体制が完成し、佐渡が一国一郡、即ち佐渡国雑太郡として国家組織に組み込まれたのはこのときからである。養老五年（七二二）、この

郡を分けて雑太郡、賀茂郡、羽茂郡の三郡とした。これは明治二九年（一八九六）まで続いた。

佐渡は古くから渡来人もあり、『日本書紀』に欽明天皇五年（五四四）、佐渡島の御名部に肅慎人が来たことが記録されている。また、『続日本紀』に天平勝宝四年（七五二）九月には渤海使輔國大將軍慕施蒙らが越後国佐渡島に漂着した記録もある。

（佐渡は天平一五年（七四三）二月から天平勝宝四年（七五二）一月まで越後国と合併していた）

離島のため古くから流人も多かった。古代から中世にかけて記録に残る最初は『続日本紀』の養老六年（七二二）穂積朝臣老。また、承久の乱に敗れた順徳上皇、日蓮宗の開祖日蓮、歌道の師範京極為兼、能楽の大成者世阿弥元清などなど。江戸時代に入っては狩野派絵師狩野胖幽、大納言小倉実起公家親子などがある。日本文化に大きな影響を与えたこの流人により、その時代、時代の都の文化が伝わった。佐渡の方言やアクセントは越後と違い京都や大阪に似ているといわれる。即ち、アクセントが京阪式といわれるのは、この歴史と、その後発展した佐渡金山や、西廻り航路、北前船の発達で京・大坂との交流の結果と思われる。

寺 社

佐渡は寺社が多いといわれる。佐渡の人は信心深いのだろうか。

江戸幕府はキリスト教の布教がスペイン、ポルトガルの侵略に結びつくことを恐れ、禁教令を出し信者の改宗を強制した。その取締りに中世末期、自然に成立していた仏教の檀家制度をとりあげて強行した。庶民は寺の檀家となることによって、仏教徒の証としたのである。そのためか佐渡は海岸沿いの集落ごとといったも良いほど寺が多く、『概観佐渡』によれば江戸末期に五三五カ寺あった寺院が明治の廃仏毀釈で一時期、八〇カ寺になったとある。しかしその後復活し現在、過疎の進む中で二七六カ寺ほどある。四国や西国から遠い離島ゆえ、島内で八八カ所巡礼ができ、三十三観音巡りができる。佐渡おけさに、

四国西国及びもないが
せめて七日の佐渡遍路

とある。

新潟県内でも越後は浄土真宗が多いといわれるが佐

渡は真言宗が多く一四四カ寺と佐渡の寺の半数を超えている。寺の縁起を見ると、来島した記録がない空海によつて開基されたとする寺が数カ寺ある。さらに上杉景勝の佐渡攻めで天台宗や禅宗から上杉が帰依していた真言宗に改宗した、と縁起にある寺が結構多いのに驚く。神仏も権力には弱いのか。

次に禅宗四四カ寺、浄土真宗三七カ寺と続く、これらの宗派は北前船、西廻り航路で京、大坂、北陸より伝わったと思われる。日蓮宗は案外少く新宗派を含めて三一カ寺である。

古い寺では佐渡国分寺（金光明四天王護国之寺）がある。聖武天皇は中央集権強化と鎮護国家の目的で、天平一三年（七四二）、国分寺建立の詔を出された。佐渡国では詔がでた後、数年かかって建立されたもようである。竣工は天平宝字八年（七六四）でなかったかといわれている。当時、六六カ国に国分寺が建立され、最も北は陸奥国分寺（宮城県仙台市）であり、最も南は大隅国分寺（鹿児島県霧島市）であった。佐渡は日本海側では出羽（遺跡不明）？について北である。

佐渡国分寺は律令体制の衰微のなかで雷火や火災で七重塔、寺堂、宝物を焼失してしまう。が江戸時代に

なると真言宗として復興し幕末には末寺が五三カ寺であった。

現在、金堂など新潟県きつて国や県の重要文化財の建物が多い蓮華峰寺も、大同元年（八〇六）空海が留学先の唐から帰国した年、開創されたとされる真言宗の寺である。幕末には佐渡四一カ寺、関東（茨城）方面にも末寺があつたといわれている。

大正一三年（一九二四）与謝野寛、晶子夫妻がそろって来島したときこの寺を訪ね、荘嚴な七堂伽藍を目の当たりにして夫妻はことのほか喜んだという。

蓮華峰寺古りし五采のあひだより天人が吹く王朝の夢
(寛)

蓮華峰寺龍女の美にも似る堂のひさしに描けり大井の川を
(晶子)

と詠んでいる。他に長谷寺など古刹が多い。日蓮宗は流人日蓮の遺跡の寺、根本寺、妙照寺、新潟県唯一の五重塔の妙宣寺、などの名刹が多い。

神社は『延喜式神名帳』（九二七）に九社が記され

ていたが、現在では二四七社である。

金山と佐渡

佐渡には平安時代に発見されたか、という西三川砂金山、天文四年（一五三五）佐渡で最初に金銀鉱脈が発見された鶴子银山など、古くから何カ所か金銀山があつた。相川に金山が発見されたのは慶長六年（一六〇二）である。この年、家康が佐渡金山を直轄とし、佐渡国を天領とした（上杉景勝が米沢に移封された年である）。幕府を開く二年前である。こうして迎えた江戸時代、佐渡は大きく様変わりする。農業、漁業だけの島に金銀産出の鉱業が加わつた。金山が盛んになればなるほど金山に関連する仕事、いわゆる金山稼ぎが盛んになった。

江戸時代初期、金山が盛んになると水替え人足など必要となり人口は急速に増えた。相川には男だけでなく遊女、娼妓なども集まつた。それでも労働力不足が生じ、無宿者なども送り込まれた。『さんせう太夫』ではないが人買業者などもいたようだ。

この頃の島民は島から出るときは出判の許しを必要とし、自由に出国は出来なかつた。また物資の他国へ

の移出も禁じられていた。それが承応三年（一六五四）から物資の他国への移出が許され、奉行所による年貢米の他国へ積み出しが始まっている。この頃になると小木港も改修され発展してくる。そして柏崎と結ぶだけの港から西廻り大坂までも御城米を運んだことや、時代が進むと松前・江差へ竹、わら、柿、栗などを移出した記録が残っている。そして松前稼ぎが出てくるのである。この佐渡金山も元和・寛永（一六一五〜四三）の頃が最も金の産出量が多くその後減って行く。

佐渡は金山の発展の中で栄え、今、伝統芸能といわれる特色ある芸能も他国との交流によつて伝わり佐渡独自に発展してきたものが多い。

芸能

明治三十九年（一九〇六）佐渡を訪れた長塚節の『佐渡が島』に、「孤島の僻邑」に能があらうとは夢にも思わなかつたところへ、自身も初めて能をみて、しかも演じているのが「桶屋や石屋や宿屋の主人などでありながら相応に品位を保つてみえる」、見物人は「大抵は百姓や漁夫のやうなものであるだろうがそれが子どもに至るまで静肅にして居たのは意外であつた」と

感服して書いている。その能を先ず見ていこう。

能を大成した世阿弥が佐渡に流されたのは永享六年（一四三四）、彼は佐渡で『金島集』を著している。しかし佐渡で能が盛んになったことと流人世阿弥とは直接関係なさそうだ。佐渡の能が盛んになるのは江戸時代からである。初代佐渡奉行大久保長安は能を愛好し、慶長八年（一六〇三）佐渡に赴任するとき大和から能楽師一行をつれて佐渡に渡ってきた。彼は神事能を援助し、また能楽師を保護した。娯楽の少なかつた佐渡では、各神社の祭礼に神社、氏子、能楽師一体となつて神事能を盛り上げた。大久保長安が帰つたあとも能楽師とその末裔が佐渡に残り指導したといわれる。

その後、潟上地頭の末裔本間秀信が奈良で宝生流の能楽を修め寛永一八年（一六四一）帰郷。奉行所より能太夫を仰せつかり、村々の神社の祭礼に神事能を指導、また庶民にまで広げていった。これが現在の佐渡の能の発展につながつた。その結果最盛期には、能舞台が組立、兼用を含め八八もあつたという。今も三三の能舞台があるが、ほとんど神社のものである。

鶯や十戸の村の能舞台

大正一三年（一九二四）、大町桂月が能舞台で一杯やりながら吟じたこの句碑も、その菅原神社に建つ。

能は貴族芸術として洗練されて発達したというが、佐渡では品位を保ちながらも、長塚節が驚いたように農民、漁民など庶民生活の情操娯楽の面がある。能舞台の残る神社では、今も祭祀に新能など幽玄な気品のある能が奉納されている。そのため能を志す者は毎週欠かさず稽古に励んでいる。

人形芝居も佐渡独得のものが伝わっている。その人形芝居がいつ佐渡で始まったか諸説があり明らかでない。江戸時代佐渡金山が盛んになると人の往来と一緒に伝わってきたようだ。説教人形、のろま人形、文弥人形の三種があるが、共に国の重要無形民族文化財に指定されている。

世界無形文化遺産の文楽は享保一九年（一七三四）から三人で操るようになったといわれている。その点、佐渡の人形芝居はより古い形、古浄瑠璃そのままの形を残すといわれ、人形を一人で操るのである。

説教人形は享保の頃から以前、上方より伝わったと考えられ、説教節の語りと人形芝居を三味線の伴奏によつて演ずる。スーパーマン坂田の金平が活躍する

合戦物が多く、キンピラ人形ということもある。

のろま人形は説教人形の合狂言として演じられる喜劇で、方言まるだして演じられる。殊に生地蔵は、お花や喜之助の間の抜けた色気のあるのろまな台詞、そして最後に喜之助が大きなチンチンをだして放尿して幕となるなど、ちよつと卑猥で品がないようでもあるが、会場は観客のくつたくなかない笑いにつつまれる。

羽茂の太神樂つぶろさしが五穀豊穰、子孫繁栄を祈願して、男性がつぶろ（大きな男根の張形）を股に挟み二人の女性とエロチックで滑稽に踊るのであるが、このつぶろさしと同じく子孫繁栄の意味があるらしく、喜之助のオシッコが掛かると子どもに恵まれると伝えられている。

明治三二年（一八九九）尾崎紅葉ものろま人形を観て気に入ったようで次ぎの句を残す。

おし並ぶ野呂間が面の露涼し

文弥人形は上方の文弥節が伝わっていたところへ、明治三年（一八七〇）になって、説教人形遣い大崎屋松之助と文弥節語りの伊藤常磐一によつて創られたとい

われる。近松門左衛門の義理人情の世界を、哀愁をおびた節回しでの語りは一時期、島民に大変な人気だった。佐渡の三大民謡についても触れておこう。全国に伝わっているものに佐渡おけさがある。この頃では日本の民謡として海外まで知れ渡っているようだ。

佐渡おけさは九州天草の南端、牛深港のハイヤ節が江戸時代、船乗りの酒盛り唄として小木に伝わった。小木ではハンヤといわれ座敷で唄われていたが、やがて盆踊りで唄われるようになり、佐渡島内に広がった。後に大正時代レコードとなると爆発的に全国に広がったのである。現在、正調佐渡おけさといわれるものは小木おけさと節回しが少し異なる。歌詞は恋愛、労働生活、風習、各集落の唄から他国で唄ったものなど誠に多様で、盆踊り唄として歌い継がれている。

相川音頭は寛文の頃からの盆踊り唄で、歌詞の内容が恋物語の心中口説きだったため、奉行所に禁止され、今の源平軍談に替えたといい、奉行の前で踊るだけに節は単調な感じだが唄も踊りも男性的で格調が高い。

両津甚句は大正の頃、両津橋を挟んであった夷の夷甚句と湊の湊甚句を一緒にして生まれた。節回しが実に美しい。

佐渡の歌舞伎についても一言述べておこう。明治の中頃、旅役者によって小木に伝わった。それが明治大正と前浜、国仲と広がり、神社の祭礼などで演じられたが、衰退していった。戦後、片野尾の祭りでも復活し子ども歌舞伎として伝わっている。

学校での伝統芸能指導

佐渡市では伝統文化継承のために、ささやかではあるが学校教育を通して支援している。今年の活動を取りまとめてみると小学校では佐渡おけさが多い。中学校では佐渡おけさの他、相川音頭、鬼太鼓、文弥人形、狂言、などが目につく。これを総合学習やクラブ活動の中で指導している。例えば羽茂は小学校が伝統芸能クラブで、中学生は謡曲クラブで謡曲の指導をうけており、草刈神社祭礼の薪能のとき小、中学生の順に演じている。真野では、中学生がクラブ活動で鷲流狂言を習って、大膳神社の例祭などで発表している。また、佐渡おけさはほとんどの学校の運動会・体育祭で踊る。佐渡ではこのようにして伝統文化、芸能の継承を心掛けているのである。